

編集後記（『年報』第一集）

比治山女子短期大学に「女文化研究センター」が誕生したのは、二年前の昭和五十七年四月のことであった。学長清水文雄先生は、女子教育に深い関心をもたれ、学園長国信玉三先生の「親心に帰れ」という本学園教育の根本命題を顕現する形で「女文化研究センター」を開設されたのであった。それは、学園の年来の願望でもあり、関係者は挙ってその開設を慶んだのであった。

しかし、同センターが機能しはじめたのはその開設から一年も後のことであった。それというのも、主任格でお世話下さった斯林不二彦教授は国文科との兼務であり、専任としてはわずかに松浦さとみ副手一人にすぎなかったからである。また、参考にすべき同様研究機関の存在も少く、その仕事の方向づけに暗中模索の時をすごしたからでもあった。

こうして、開設から一年、同センターは、斯林教授のご苦辛の末に、やっとその仕事の方向づけが定まり、作業に取り掛かったのであった。その間の事情は松浦副手の「一年間の歩み」に詳しい。同センターは、松浦副手もいうように、平素は資料の収集・整理の業務を主とするのであるが、それとは別に、年間の女文化に関する研究の成果を公表する任務も併せもっている。『年報』の刊行がそれである。しかし、この種の『年報』刊行もはじめての試みで、その形式も内容も未だ満足いくものではないが、先ずは公表させて頂き、先賢のご教示を得て一層の充実をはかっていきたいと考えている。

なお、同センターの主たる仕事に当たられた斯林教授は、心労が重なったのか、本年二月にご入院、手術を受

けられ、現在静養されている。そこで、不肖ながら、『年報』刊行についての仕事を引き継ぐことになったのであるが、幸い、有能な副手松浦さんのお力添えを得て、やや遅れはしたものの、ここに第一集を刊行できる運びになったことを喜んでゐる。今は、斯林先生の一日も早いご快癒をお祈りするとともに、玉稿をお寄せ下さった先生方、並びに装丁をお引受け下さった美術科の助教授、浜田俊彦先生に、心から感謝の意を捧げるものである。

女文化研究センター『年報』第一集（昭・59・3・31）